

第二回 講義 (2011/04/22)

§ 2 コリングウッド・テーゼの説明

コリングウッド (R. G. Collingwood) は、『自伝』で次のように主張している。

「[ひとが語ったことの]意味を見いだすためには、彼が語ったり書いたりしたことがどのような質問(彼の心の中の質問、そして彼によってあなたの心の中にあると想定されていた質問)への答えとして意味されていたのかを知る必要がある。」¹

彼の『形而上学に関するエッセイ』(1940)では、次のように述べている。「誰によって行われる言明はすべて、質問に答えることとして行なわれる。」² 我々は、彼のこのような主張にちなんで、次のテーゼをコリングウッド・テーゼ (CT) と呼ぶことしたい。

CT 「すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」

コリングウッドの意味論的な関心がどのようなものであったかは不明であるが、ここに CT と名付けたテーゼと近いことを考えていたことは確かであり、しかもその重要性を明確に認識していた。この主張は哲学の多くの領域で重要な帰結をもたらす重要なものである。しかしコリングウッドはこれの厳密な証明を与えていないように思われるので、この章では、コリングウッド・テーゼの厳密な証明をおこなわない。

ところでこのテーゼは、まだあいまいかもしれない。このテーゼが正しいとすれば、このテーゼの意味を明らかにするには、このテーゼがどのような問いに対する答えであるのかを確定しなければならない。同じ言明であっても、異なる問いに対する答えである時には、異なる意味を持つからである。このテーゼは、次の問いに対する答えである。

「言明が意味を持つのは、どのような場合か？」ないし

「我々は、言明の意味をどのようにして明確にできるのだろうか？」

したがって、このテーゼは、「すべての言明が、問いに対する答えとして発生している」と主張しているのではない。CTの主張は、「すべての言明は、問いに対する答えとして理解するときのみ、理解可能である」という意味である。我々は、文法に従って語を結合したり、あるいは、すでにある有意味な文の一部を、他の語と置き換えるというような、機械的な操作によって、文法的に正しい文を作ることができる。そして、文法的に正しい文のすべてが有意味であるのではないとしても、このような機械的な操作によって偶然的に有意味な文を作ることができる。しかし、その文の意味を理解するためには、我々はそれを何らかの問いの答えとして理解する必要がある、というのが、CTの主張である。

§ 3 コリングウッド・テーゼの「推論」の観点からの証明

昨年の講義では、「焦点」に注目して CT を証明しようとした。その証明は、焦点についての経験的認識にもとづくものであって、厳密な証明にはなっていなかった。そこで、より厳密な証明のために、ここでは「推論」に注目することによって CT を証明したい。これを次の二つのテーゼの証明によって行いたい。

¹ R. G. Collingwood, *An Autobiography*, Clarendon Press Oxford, 1978, p. 31.

² R. G. Collingwood, *An Essay on Metaphysics*, Clarendon Press Oxford, 1998, p. 23. Gadamar は、「問答の論理学」というコリングウッドのアイデアに言及して、それを基礎にして解釈学の方法を展開した。Cf. Hans-Georg Gadamar, 'Wahrheit und Methode', the 4. edition, J. C. B. Mohr Tuebingen, 1975, pp. 351-360.)

テーゼ a 「すべての言明は、何らかの推論の結論としてのみ意味を持ちうる」

テーゼ b 「すべての推論の結論は、問いに対する答えとしてのみ成立する」

このテーゼ a は、「すべての言明は、何らかの推論の結論としてのみ発生する」と主張しているのではない。なぜなら、言明は、他者から教えられた言明の機械的な反復や、すでに行った言明のなかの表現を別の表現に置き換えることによって、機械的に作り出すことができるので、推論の結論として発生するとは限らないからである。しかし、そのような言明の意味を理解する場合も含めて、テーゼ a は「すべての言明は、その意味が理解されるときには、つねに何らかの推論の結論となっている」と主張している。

このテーゼ a の意味について CT を適用しようとするならば、このテーゼは、CT の場合と同じく次の問いに対する答えとして理解されるべきだろう。

「言明が意味を持つのは、どのような場合か？」

この答えがテーゼ a であるとしよう。ところで、このテーゼ a を自分自身に当てはめて考えるならば、

「テーゼ a は、何らかの推論の結論としてのみ意味を持ちうる」

というべきだろう。テーゼ a の意味は、テーゼ a を推論の結論として証明した時に与えられることになる。

(あるいは、ここで、テーゼ a と CT の両立可能性について、疑念が生じるかもしれないが、それについてはテーゼ a を証明した後で検討したい。)

1、古典的プラグマティズムによるテーゼ a の証明

(1) パースの直観批判

パースは、

PT 「すべての精神作用は推論である。」³

と主張する。この主張が証明できれば、言明を行うことは精神作用の一部であるので、我々はテーゼ a を導出できるだろう。

パースによる PT の証明を紹介しよう。

①パースは、「わたしたちは、直観の能力をもたない。あらゆる認識は以前の認識によって論理的に限定される」(p. 130)と述べる。ここでいう「認識が以前の認識によって論理的に限定される」とは、「推論」に他ならないという。

②次に必要なのは、「直観の能力を持たない」ということの証明であろう。

彼は、これを別の論文⁴でおこなっている。

パースはそこで、認識を次の二つに区別する。

「以前の認識によって限定される認識」

³ Peirce, Some Consequences of Four Incapacities, in *Journal of Speculative Philosophy*, Vol. pp. 140-157, 1868) 翻訳タイトル「人間記号論の試み」(『世界の名著 48』中央公論社、p. 131)

⁴Peirce, Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man, in *The Journal of Speculative Philosophy*, Vol. 2, pp. 103-114, 1868)

翻訳タイトル「直観主義の批判」上山春平、山下正男訳(『世界の名著 パース、ジェイムズ、デューイ』中央公論社、103)

「以前の認識に限定されない認識」＝「対象と直接にかかわる認識」＝「直観」
そして、後者が存在しないことを論証している。

ここで、まず次の問いに答える。

「第一の問、対象を認識する場合、その認識は以前の認識の限定を受けるのか、それとも対象と直接にかかわるのか、を正しく判定する能力、それも、なんの予備知識ももたず、記号を使って推論することもなく、漫然と思いをめぐらすだけで、判定できる能力を、私たちはそなえているのだろうか」
(p.103)

仮に我々の認識が、直観による認識と推論による認識に分けられるとしよう。このとき、ある認識が与えられた時に、それがこのどちらであるのかを、我々が知るのには、推論によるものであるのか、直観によるものであるのか。

もしこれが直観によるものであるとすると、この直観は、我々の認識についての直観になる。

「わたしたちがそういった能力をもっているということの現実的な証拠は、たんに、私たちがそういった能力を持っているように感じられるという事実だけである。しかしこのような証明は、そういった感じが教育や過去の観念連合の結果なのかそれとも一種の直観的な認識なのかを区別できる能力を、そういった感じ自体のなかに想定しようとするにほかならない。換言すれば、そのような証明は、証明すべき事柄を前もって前提しているのである」(p. 104)

したがって、答えは「ノー」である。

彼はこの論文の最後で、次の問いに答える。

「第七の問い、以前の認識によって限定されない認識が存在するか」(124)

我々の認識が、以前の認識に限定されているのだとし、さらにこの認識もより以前の認識に限定されるのだとしよう。もしこれを無限に繰り返すことはできないのだから、この系列には第一項がなければならず、それは以前の認識には限定されない認識でなければならない。

この主張にたいして、パースは次のようにいう。

「以前の認識によって限定されない認識があるということを、直観的に知ることは不可能である」
(p.124)

この理由は、第一の問いに「ノー」と答えたからである。

「そういったことを知ることでできる唯一の方法は、そういったことを一応想定してみて、その想定を吟味するという間接的なやり方でなければならない。」

「さて、今仮に、ある認識が意識の外にあるものによって限定されるとしよう。ところが、意識の外にあるものは認識ではない。」そうすると、意識の外に存在するものによって、ある認識が直接に限定されると想定することは、「いかなる説明能力をも持たない限定作用を想定することになるであろう。しかし、こうした想定は決して是認できない。」(p.124)

したがって、直観は存在しない。 Sellars の言い方をすれば、意識の外に存在するものは conceptual ではないが、認識は conceptual である。conceptual でないものが、直接に conceptual なものを限定することはできない、といことになる。

私は、以上のPTの証明に賛成する。そして、PTによって、テーゼaを証明できると考える。

(2) デューイの推論主義

John Dewey も同様の主張をしている。⁵

DT 「根拠ある言明としての知識は、すべて媒介を持つ。」

「保証付きの言明には、すべて推論の働きが含まれている」

我々の現在の関心とかかわる範囲で、パースとの違いを2点指摘することができる。

①DT からテーゼ a を証明することは難しい。なぜなら、DT は「保証付きの言明」をあつかっているの
で、これから「真とみなされた言明はすべて、推論の結論として理解される」を証明することはできるが、
この主張は、テーゼ a とは異なるからである。(ただし、DT から「文法的に正しいことあるいは有意味で
あることが保証された言明には、すべて推論の働きが含まれている」を導出することができるかもしれな
い。そして、そこからテーゼ a を証明することができかもしれない。)

②デューイは、イギリス経験論が感覚から出発することを、DT によって批判するが、他方で、大陸合理
論も論理法則を直接的な知識の対象としているとしてDT によって批判する。⁶つまり、論理法則および推
論法則の正当化を、直接的知識によって行うことができないことを指摘した点が、パースと異なるところ
である。デューイによれば、パースが主張した立場は、「論理的な形式と関係についての命題は、すべて指
導原理であって前提 [直接的知識]ではない、とする立場」(p. 544) ([]入江の付加) である。

「この観点からすれば、それらは操作を定式化したものであって、(a)保証付きの結論に導くあらゆる
探求において遂行される操作に関する仮説であり、(b)これまで確固とした言明に導いたあらゆる事例
において例外なく確認された仮説である。そして、そこに述べられた条件を守らなければ、もろもろ
の探求とそれらの結果についての経験からして、不安定な結論にいたることが分かっている。」(p. 544)

これに対して、デューイは、論理法則も含めてすべての言明の正当化を整合性によって保証しようとして
いるように思われる。

「(a) 推理された解釈は、特殊な諸対象のその特殊性によってテストされ確認され検証される (あ
るいはその繁多の解釈がテストされ確認され検証される) と主張しているのではない。逆に、もろも
ろの特殊を整合的な全体へと秩序づけ組織するのが、推理された観念の能力であり、そうすることが
できるかどうか、観念の妥当性をはかる基準である。(b) 推理だけが論理的機能のすべてであり、
それだけであらゆる論理形式を決定する、と主張しているのでもない。逆に、テストの意味での論証
もまた、同様に重要な機能である。」(p. 545)

⁵ John Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*, Henry Holt and Co., 1951

(デューイ『論理学』魚津郁夫訳、『世界の名著 48』中央公論社、p. 545)

「第8章、直接的な知識 ——理解と推理」

⁶ Brandom は、イギリス経験論を *representationalist approach* であり、大陸合理論が *inferentialist approach* であるとしていた。(Cf. *Making It Explicit*, p. xvi) Dewey ならば、両方とも *representationalist* とするだろう。